

科研費と戦略的創造研究推進事業 の連携について

2026年3月4日

文部科学省
科学技術・学術政策局 研究開発戦略課 戦略研究推進室
研究振興局 学術研究推進課

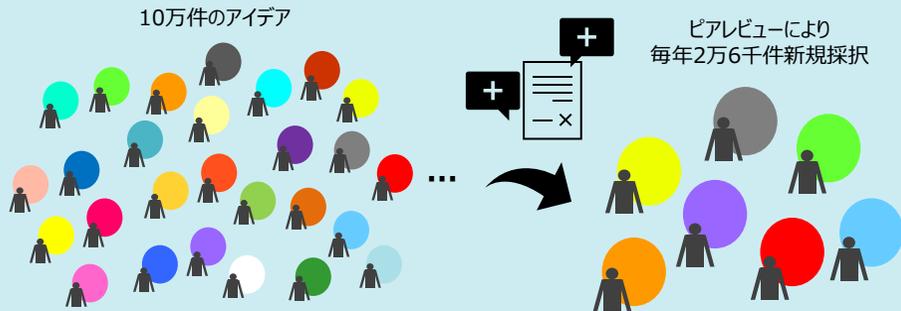
科研費・戦略事業のボトムアップ・トップダウンによる基礎研究の支援

- **科学技術・イノベーションは国力の源泉**であり、国の社会経済の発展、そして国家安全保障に直結することから、**知の地平線を拡大させる基礎研究・学術研究の強化が重要**。我が国の研究力が相対的に低下傾向となっている中、研究トピックの後追いが指摘されており、**若手研究者を中心に既存の学問体系に捉われないチャレンジングな研究への挑戦を後押し**するなど、**新たな研究分野の開拓・先導が必要**。
- **科学技術・イノベーション力の向上のためには、イノベーションの源となる多様な研究を支援**すること、それらの研究成果を新しい価値の創造に繋げる**ことが重要**であり、社会変革の種となる研究を支える「科学研究費助成事業」、社会変革を先導する「戦略的創造研究推進事業」により、**ボトムアップ・トップダウンの両面から新興・融合研究等の基礎研究を支援**。

科研費 科学研究費助成事業（科研費）

JSPSから補助

- **研究者の自由な発想に基づいて行われる研究（学術研究）**を段階に発展。予測不能な社会変革にも柔軟に対応できるよう、**全分野の研究を支援することで、イノベーションの源泉となる多様性の苗床を確保**。
- ボトムアップによる独創的な研究アイデアの**学術的重要性等を、ピアレビューにより厳格に審査**。採択研究者が**研究遂行に全裁量**。
- 新規・継続合わせて約**8万件**の研究課題。平均配分額は年間約**250万円**。



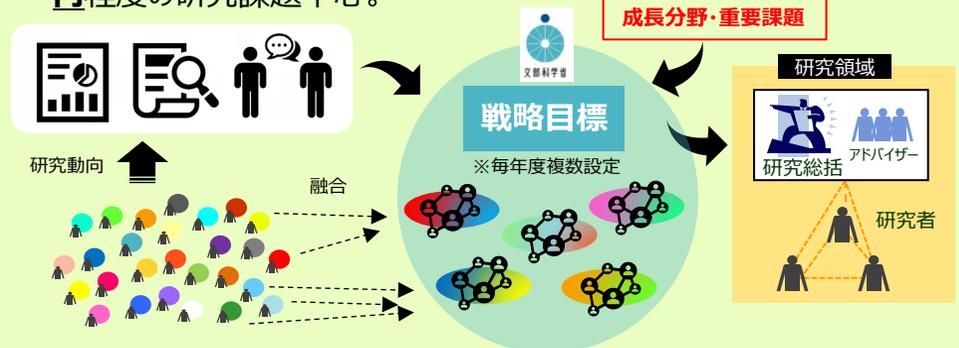
学問分野の深化・発展、新領域の開拓など、
科学の発展の種をまき、芽を育成

Curiosity-driven Research

CREST ACT-X 戦略的創造研究推進事業 (新技術シーズ創出)

JSTから委託

- **国が定めた戦略目標の下、我が国の成長・重要課題解決に資する融合研究領域を設定・推進し、基礎研究と政策課題の橋渡し**を担う。
※戦略目標：研究動向や社会・経済的な動向の情報収集・分析等により、その時々サイエンスの潮流や政策課題を俯瞰し、戦略的な基礎研究の大きな方向性を定めるもの。
- **戦略目標の達成に向けて、研究総括に大きな裁量**を与え、研究領域をマネジメントし、先導的・独創的な研究の**発掘と育成**、分野融合などを推進。
- 新規・継続合わせて約**1,600件**の研究課題。年**1,000~5,000万円**程度の研究課題中心。



我が国の成長・重要課題解決に資する新技術シーズ創出

Mission-oriented Research

第7期科学技術・イノベーション基本計画（答申素案）のパブコメ版において、科研費および戦略的創造研究推進事業は、若手研究者の挑戦的な研究の支援、新興・融合研究の推進に関する中核的な役割を期待されている。

また、科研費は他の取組とも連携し、新たな研究領域の継続的な創造をすることが求められており、戦略的創造研究推進事業は主要な連携先となっている。

第7期「科学技術・イノベーション基本計画」（答申素案）（令和8年2月5日 パブコメ案）【抜粋】

第2章 知の基盤としての「科学の再興」

1. 新たな研究領域の継続的な創造

(1) 若手・新領域支援の一体改革

科研費の倍増に産学からの高い期待が寄せられていることを踏まえ、多様な学術研究を支援しつつ、若手研究者による挑戦的・萌芽的な研究、既存の学問体系の変革を目指す研究、国際性の高い研究などへの支援を強化する。審査システムの見直しを通じた分野硬直性の打破などの改革を強力に推進しながら、既存の研究費の改革を行いつつ、**他の取組とも連携し**、科研費を大幅に拡充する。（略）

創発的研究支援事業、特別研究員事業及び戦略的創造研究推進事業を通じて、挑戦的な研究に取り組む若手研究者への長期・安定的な支援を強化する。（略）

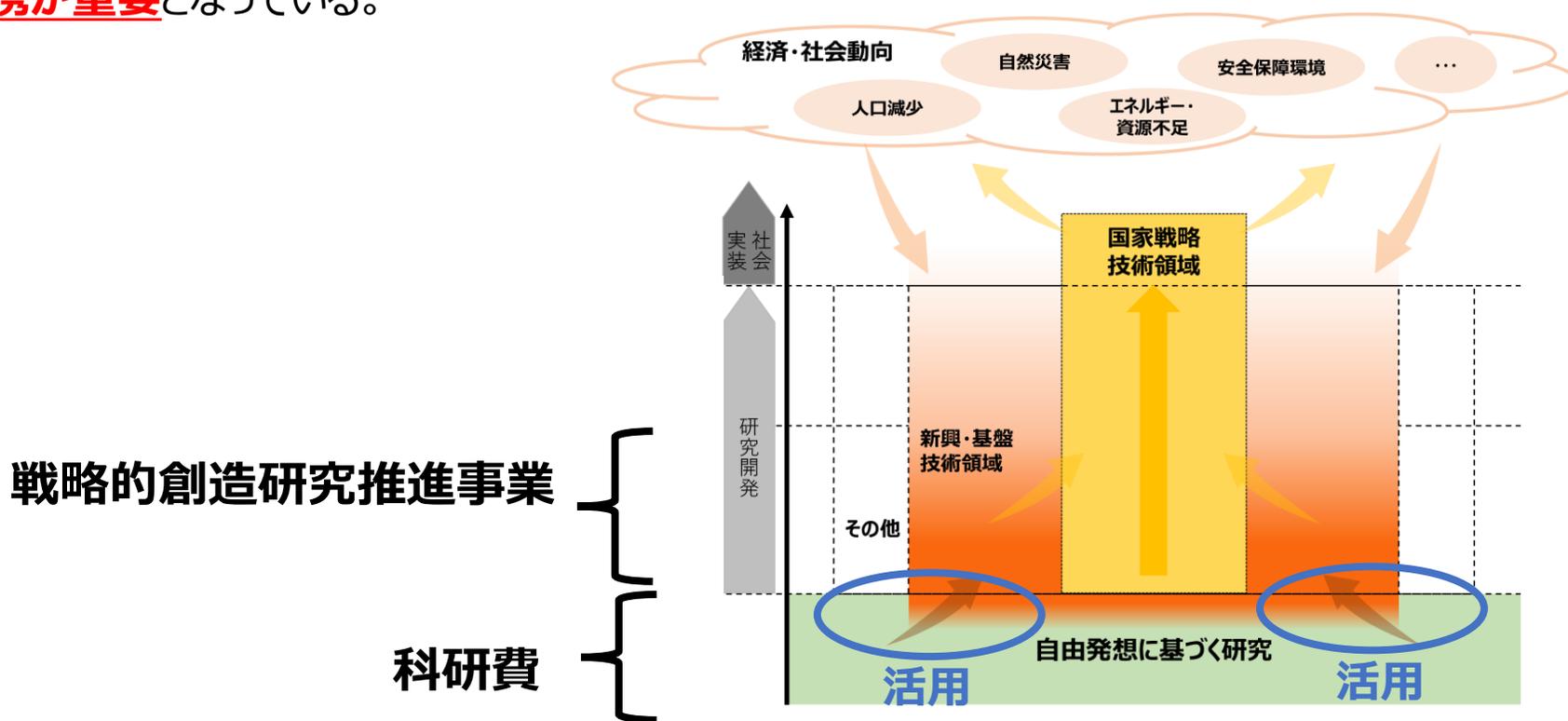
(2) 戦略的な新興・融合研究の推進

戦略的創造研究推進事業、共創の場形成支援プログラム等の政策対応型研究において、段階的なチーム形成や新興・融合領域の価値の見定めを行い、成果最大化の方向に支援を拡大する育成型のアプローチといった観点でファンディングを強化する。革新的な新興・融合研究への研究者の挑戦の促進に向けた研究支援や新たな評価の導入を後押しする。（略）

重要技術領域（第7期科学技術・イノベーション基本計画）

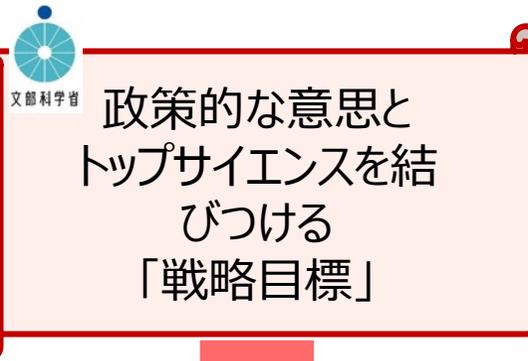
第7期科学技術・イノベーション基本計画（答申素案）のパブリック版において、研究者の自由発想に基づく基礎研究をイノベーションの源泉とし、こうした知の基盤の構築と国の重要技術の両者を支援することを定めている。

その中で、戦略的創造研究推進事業は重要技術を推進する中核事業に位置付けられており、科研費による自由発想に基づく研究成果を重要技術に活用する観点からも**科研費・戦略事業間の連携が重要**となっている。



科研費と戦略的創造研究推進事業の位置づけ

研究者の自由な発想に基づく
優れた基礎研究等の
トップサイエンスの潮流を把握



我が国の将来に向けて
克服すべき重要課題に
必要な取組を検討



科学研究費助成事業

研究者の自由な発想に基づく
独創的・先駆的な
学術研究を幅広く助成



戦略的創造研究推進事業

国が定める戦略目標の下、
イノベーションに繋がる
新技術シーズを創出・育成

課題解決型プロジェクト

産学連携

スタートアップ

創出された優れた基礎研究の
成果の発掘・育成、分野融合

創出された新技術シーズから
新たな事業やイノベーションに展開

第7期科学技術・イノベーション基本計画の推進のために

科研費・戦略事業の連携強化による新興・融合研究の加速が不可欠

科研費・戦略事業の連携による革新的な新興・融合研究の加速（案）

- ・ イノベーションの推進にあたり、我が国の基礎研究の強みを効果的に社会課題解決や経済成長に資する技術シーズに発展させる機能が重要。
- ・ 研究者の自由な発想に基づく研究を支援し優れた研究成果を創出する**科研費**と、重要な社会・経済的な課題の克服につながる**新技術シーズ創出**に発展させる**戦略事業**は、**両事業それぞれの目的・役割を果たしつつ、互いの強みを伸ばすための連携を強化し、優れた基礎研究成果の効果的な成長分野に資する技術への発展や、次代を担うトップ研究者の育成と未来の成長領域での活躍を促進。**

連携①
科研費等の最先端の研究動向を踏まえた戦略目標の設定

科研費 科学研究費助成事業

研究者の自由な発想に基づくボトムアップ型研究

学術的な観点から
 独創的・先駆的な
 優れた研究を推進
 ⇒ 我が国の強み



研究動向

CREST ACT-X 戦略的創造研究推進事業 立派 ERATO (新技術シーズ創出)

新技術シーズ創出のためのトップダウン型研究

社会課題解決や経済成長に向けた
 研究領域（戦略目標）の検討のため、
 トップ研究者の知見を活用し、注目す
 べき領域を特定する取組を強化



最先端研究の動向を的確に捉え、成長・課題解決に資する新技術シーズ創出を効果的に推進

連携②
若手研究者による挑戦的・分野融合的な研究への支援拡大

若手研究者の自由な
 発想に基づく**挑戦的**
研究への支援を拡大



自由発想で生まれ
 た芽を社会課題解
 決やイノベーションに
 結びつける

科研費の若手研究者の
 更なる活躍の場として、
**戦略事業の若手支援を
 拡大**



幅広い研究者との交流によって若手研究者
 の自由発想に基づく研究が促進し、
新たなアイデア生成が活性化

ネットワーク構築の場 等



若手間の連携が進み、戦略目標の達成に
 繋がる若手を中心とした**分野融合チームの
 形成が促進**

分野融合
 チーム

新たな
 アイデア

連携③
未来を担う若手研究者間の連携促進

優秀な若手研究者の育成と活躍の場の拡大

連携④
**研究活性化に向けた
 両事業の制度改善の
 一層の推進**

**各事業の目的を達成するための審査手法の高度化や事務手続きの更なる効率化など、
 科研費・戦略事業が先導的な役割を果たし、我が国のファンディング改革や研究者の負担軽減等を促進**

参 考

第2章 知の基盤としての「科学の再興」

1. 新たな研究領域の継続的な創造

連携①、②、③の根拠

(1) 若手・新領域支援の一体改革

科研費の倍増に産学からの高い期待が寄せられていることを踏まえ、多様な学術研究を支援しつつ、若手研究者による挑戦的・萌芽的な研究、既存の学問体系の変革を目指す研究、国際性の高い研究などへの支援を強化する。審査システムの見直しを通じた分野硬直性の打破などの改革を強力に推進しながら、既存の研究費の改革を行いつつ、他の取組とも連携し、科研費を大幅に拡充する。

科研費の全面基金化に向けた取組を推進し、研究者の煩雑な事務負担を軽減し、研究時間確保につなげる。

創発的研究支援事業、特別研究員事業及び戦略的創造研究推進事業を通じて、挑戦的な研究に取り組む若手研究者への長期・安定的な支援を強化する。（略）

(2) 戦略的な新興・融合研究の推進

戦略的創造研究推進事業、共創の場形成支援プログラム等の政策対応型研究において、段階的なチーム形成や新興・融合領域の価値の見定めを行い、成果最大化の方向に支援を拡大する育成型のアプローチといった観点でファンディングを強化する。革新的な新興・融合研究への研究者の挑戦の促進に向けた研究支援や新たな評価の導入を後押しする。（略）

5. 研究施設・設備、研究資金等の改革

連携④の根拠

(4) 研究評価の見直し、研究資金制度の継続的改善等

国際的な研究評価改革の動向等も踏まえつつ、政策、施策及び研究開発プログラムの評価の在り方についても検討した上で、「国の研究開発評価に関する大綱的指針」（平成28年12月21日内閣総理大臣決定）について2026年度内を目途に見直す。その際、科学技術・イノベーションにより社会課題を解決していくという観点から、経済・社会への影響を評価するとともに、定量的評価に過度に偏重しないようにすることも考慮する。

競争的研究費に関し、特に継続的に公募を行うものについて、新たな資金配分の方策を探り、都度ピアレビューを経るのではなくそれ以前の成果・実績等に連動して配分する仕組みや、申請書作成や審査の負担を軽減しつつ不確実性への投資が可能となる仕組みを検討し、スモールスタートでその効果の検証も踏まえながら展開を図る。また、研究力を先端的な手法を取り入れつつ多様な視点で分析、評価する手法を検討する。

各競争的研究費において、その使い勝手がベストプラクティスにそろうよう改善を図る。同時に、研究時間確保に向けて、申請書・報告書等の刷新を始め、資金配分機関の連携を含めた申請手続等の簡素化・効率化を進める。また、アカデミアにおける、学協会の活動・運営負担の在り方やヒエラルキー構造、それに伴う論文のオーサーシップの在り方といった慣習の見直しについても後押しする。

（別紙）第7期科学技術・イノベーション基本計画の指標と目標について

連携②、④の根拠

（略）なお、ここで掲げる目標値は、我が国の科学技術・イノベーション政策の質の向上を目的として、基本計画の進捗・成果の状況の一側面を把握するために定めるものである。このため、これらが個々の研究者等の評価にそのまま活用されることを目的としたものではない。また、機関の評価に際しても、その機関のミッションや評価の目的に照らし、適切に指標を設定する必要がある。研究者等や機関の評価の際には、定量的指標に加え、定性的指標も適切に組み合わせることも考慮すべきである。目標値の達成が自己目的化し、本来目指すべきものが見失われることのないように留意が必要である。

1. 我が国の研究力の向上に関する指標

連携②の根拠

指標	目標	現状
若手を中心とした挑戦的な研究課題の件数	13,000 件程度 (2030年度)	6,500 件程度 ¹⁸ (2024 年度)

18 科研費、創発、戦略創造のうちの関係研究課題数

科研費・創発事業による若手・新領域支援の一体改革

(若手研究者を中心とした挑戦的・国際的・創発的研究への支援)

令和8年度予算額(案)	2,479億円
(前年度予算額)	2,379億円)
令和7年度補正予算額	433億円



背景・課題

- 我が国の研究力は、Top10%論文数等の指標からも相対的に低下傾向となっている中、研究トピックの後追いや研究活動の国際性の低さが指摘されている。
- このため、我が国の研究力強化のためには、**若手研究者を中心に既存の学問体系に捉われないチャレンジングな研究への挑戦を後押しするとともに、国際ネットワークへの参入を支援**することが重要であり、**若手研究者を中心とした挑戦的・国際的・創発的研究への支援を強化**する。

統合イノベーション戦略2025(令和7年6月6日閣議決定)

・既存の学問体系に捉われない研究テーマを後押しするため、科学研究費助成事業(以下「科研費」といふ。)等の競争的研究費を通じて研究力の一層の強化、科研費における国際性、若手研究者支援や創発的研究支援等を通じて研究環境改善を推進する。

経済財政運営と改革の基本方針2025(令和7年6月13日閣議決定)

・科研費等の競争的研究費の充実を通じた研究力の一層の強化に取り組むべく、支援の在り方を検討する。

新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画2025年改訂版(令和7年6月13日閣議決定)

・若手研究者を中心とした挑戦的・国際的・創発的研究への支援の積極的な拡充や、国際共同研究支援の拡充に取り組む。

「強い経済」を実現する総合経済対策(令和7年11月21日閣議決定)

・科学研究費助成事業について、国際的研究への支援強化や若手研究者の研究時間確保のための全面基金化に向けた取組を推進することなどを通じ、大幅に拡充する。若手研究者による創発的研究への支援を強化する(略)。

令和7年度補正予算及び令和8年度予算(案)の骨子

① 科研費 科学研究費助成事業

2,479億円(前年度予算額 2,379億円)
[令和7年度補正予算額 300億円]

全分野の「学術研究」を支援する研究者の自由な発想に基づくボトムアップ型の競争的研究費

- ピア・レビュー(※)による厳正な審査を行い、採択率約27%(応募件数10万件)の競争を経て独創的・先駆的な研究を採択
- 研究の多様性と裾野の広がりを確保することにより、新たなイノベーションの芽を創出
- 最新の研究成果を広く公開することで、すみやかに産業界や社会へ還元
- 研究者のキャリアアップや研究テーマの進展に応じて柔軟に選択できる研究種目を設定
- 研究種目、審査システム、研究費の使い勝手等について不断の見直しを実施

(※ 年齢構成や研究機関のバランスを考慮して選ばれた当該分野に精通する研究者による審査。毎年審査委員の3分の1を改選)

1.若手・新領域支援の一体改革・拡充

研究のブレークスルーをもたらすアイデアを重視し、既存の学問体系の変革を目指す「挑戦的研究(萌芽)」において、若手研究者の挑戦を積極的に促すための若手支援強化枠を設定するとともに、「学術変革領域研究(B)」「基盤研究(S)」の基金化により若手研究者の研究時間を確保し、新興・融合領域研究を活性化

2.国際的な研究への支援強化

若手研究者を中心に、国際的な研究への支援を一層強化するとともに、若手研究者の応募が多い「基盤研究(B)」において、国際性を発揮することが期待できる研究に対する研究費の重点配分を拡充

【令和7年度補正予算額 133億円】

(※令和元年度補正予算から基金により支援実施中)

② 創発的研究支援事業

独立前後の若手研究者(※)を対象に、7年間(最長10年間)の安定した研究資金と、研究に専念できる環境を一体的に提供

- 多様性と融合により破壊的イノベーションにつながる新たなシーズの創出を目指す「創発的研究」を支援
- 面接も含めた多段階審査により研究者の人物や研究構想を評価し、採択率約10%の競争を経て研究者を採択
- 丁寧な伴走支援に加え、国際競争力や研究者の融合・流動性等を強化する取組(国際共同研究やポスドク等の支援など)を実施
- 採択研究者のTop10%論文割合が我が国の平均を大きく上回るなど優れた成果を創出

○ 支援内容

(※ 博士号取得後15年以内)

年間700万円(平均)の安定した研究資金

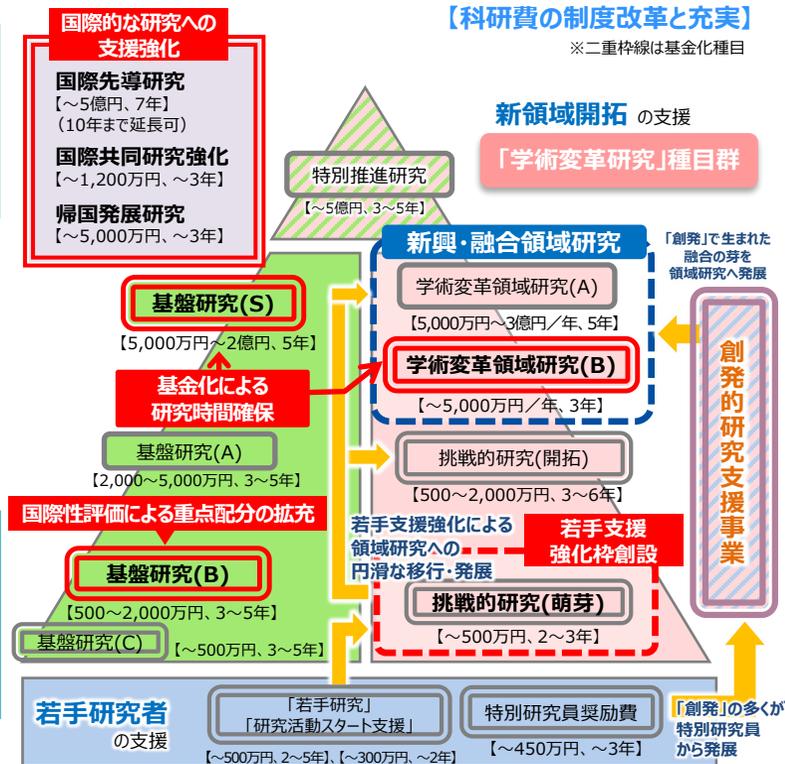
研究者の環境改善に努めた機関への追加支援

「創発の場」の形成POによるメンタリング

若手・新領域支援の一体改革による新領域創出のイメージ

【科研費の制度改革と充実】

※二重枠線は基金化種目



科研費を通じた研究システム改革の実現 (令和8年1月)

□ 財政審建議において示された「**若手研究者の活躍機会の乏しさ**」「**研究の国際性の乏しさ**」「**資金配分の硬直性**」に対応した**科研費そのものの大幅見直し**に加え、**科研費が他の取組に横串を刺し、これまでにない研究システム全体での大胆な改革を進める**。

若手研究者の活躍機会の拡大

【現状】

- ・ 国立大学本務教員(40歳未満)：30%(H16)→22%(R4)
- ・ 科研費の採択率(40歳未満)：26%(H16)→35%(R6)

【今後の取組】

- ・ 若手研究者の新領域・国際研究の拡充等(R7審査～)により若手の活躍機会を拡大するとともに、基金化(R7補正)を通じて若手の研究時間を確保

研究の国際性の推進

【現状】

- ・ 国際共著論文割合：日本36.5%(R5)
※ 米国46.7%、英国75.5%、ドイツ64.2%

【今後の取組】

- ・ 国際性評価の高い研究への重点配分(R7～)や国際種目の採択枠の拡大(R7補正)、国際種目の整理・再編も検討するなど、国際的な研究を加速

資金配分の硬直性の打破

【現状】

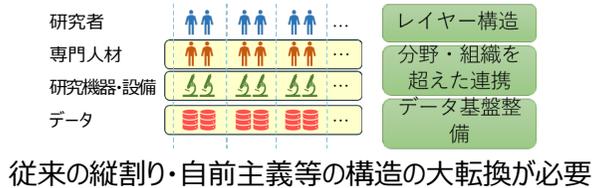
- ・ 科研費の審査システムを見直し、新たな審査区分(大型種目321→11)や方式を導入(H30)

【今後の取組】

- ・ 審査区分の抜本的見直し(R7パブコム、R9～適用)や学際研究の発展に資する審査の導入(R7導入検討、R9～ 試行)など、分野硬直性の打破を加速

新たな時代の要請に対応した研究システム全体での改革

【現状】



【今後の取組】

AI for Science

- ・ 審査や研究におけるAI活用を推進し、研究の高度・加速化を支援

先端研究基盤刷新事業(EPOCH)

～全国の研究者が挑戦できる研究基盤への刷新～

- ・ 先端設備・機器の整備・共用・高度化を推進し、競争的研究費の使途の変容促進(設備の重複確認等)

組織を超えた連携

- ・ 人/データベース/戦略等において JSPS-JSTなど FA間の相乗効果を発揮
- ・ 経済界と学術界の関係強化 (民間の基礎研究グラントの掘り起こし・接続等)



現代は「科学とビジネスの近接化」の時代

科研費と他取組・制度との連携・接続を強化し、研究システム全体の改革を実施 (今年度から順次改革に取り掛かる)

【基金化による研究時間の確保及び事務負担の軽減】

- 補助金制度で必要な毎年度の交付手続きや、繰越申請手続き等が基金制度では不要となり、**研究者の事務負担軽減及び研究時間の確保に貢献**。会計年度にとらわれない**国際共同研究の進展**、計画どおりに進みにくい**斬新な研究への挑戦**、**研究とライフイベントの両立**にも寄与。
- 応募・審査手続の電子化・記入項目の整理・統合等**により、**研究者・研究機関・資金配分機関それぞれの負担を軽減**。

【研究計画のイメージ】

・基金制度では総額の中で柔軟な研究費の使用が可能。



【若手研究者支援の拡充】

- 研究のブレークスルーをもたらすアイデアを重視し、既存の学問体系の変革を目指す「挑戦的研究（萌芽）」において、若手研究者の挑戦を積極的に促すための若手支援強化枠**を設定（R8～）。
- 若手研究者からの応募が多い「基盤研究（B・C）」において、**若手かつ国際性の評価が高い課題のための採択枠**を設定（R7～）。**若手研究者が国際性の高い研究課題に取り組む機会を拡大**。
- 若手研究者の採択率を高め、我が国のアカデミアを担う優秀な研究者を育成**。

科研費の採択率（40歳未満）：
26%（H16） → 35%（R6）



【既存の分野の枠に収まらない新たな研究の発展】

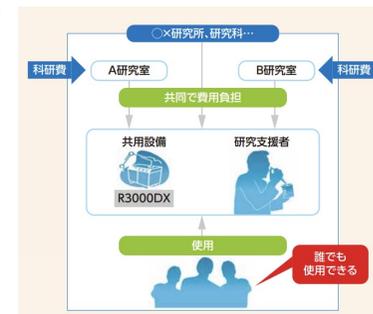
- AIの活用や新興・融合研究の発展など新たな研究動向に対応するため、科研費の審査区分表について、昨今及び今後10年の学術動向を俯瞰し、**既存の分野の枠に収まらない新たな研究の発展を促進するため、令和10年度に向けた見直しを検討中**。

見直し案の例：複数大区分にまたがる量子情報関連中区分の新設

- また、**新興・融合領域につながり得る学際性の高い研究に配慮した審査体制の構築**のため、「**挑戦的研究**」においては「**挑戦性**」に関する**クリアなメッセージを発信**し、応募者及び審査委員の十分な理解を得るとともに、**複数の審査区分を選択できる仕組み**（他区分の審査意見を加味して評点を付すことができる）**等の導入を検討中**。

【研究設備・機器の共用の促進】

- 限られた研究費の有効活用を図る観点から、補助事業の遂行に支障のない範囲内で**研究設備・機器の共用を促進することが必要**。
- 科研費の使用ルールにおいて、**科研費により購入した研究設備・機器（取得価額1,000万円以上）の共用に努めるべき旨を定め、研究設備・機器の共用を促す**など、研究費の有効活用を図っている。
- 設備購入に**他の経費を合算して使用**すること、補助事業の遂行に支障のない範囲で**他の研究に使用することを可能とする**など、自由度を高めている。



戦略的創造研究推進事業について

概要

○文部科学省が定めた戦略目標・研究開発目標の下、イノベーションの源泉となる基礎研究を戦略的に推進する主にアカデミアを対象とした競争的研究費事業（実施主体はJST及びAMED）

○30年以上に渡って、「CREST」、「さきがけ」等のプログラム名で、多くの研究者コミュニティに根付いた研究費

◆ 事業の特徴

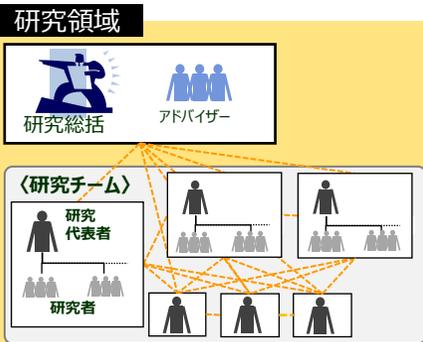
- 戦略目標により迅速な政策誘導を実施
- 研究総括の優れた目利きにより、先導的・独創的な研究課題を採択
- 通常の研究活動・学会活動等では出会えない異分野研究者との密な交流・ネットワーク形成、異分野融合を促進

文部科学省 戦略目標・研究開発目標の策定・JST・AMEDへ通知

各種プログラム

CREST

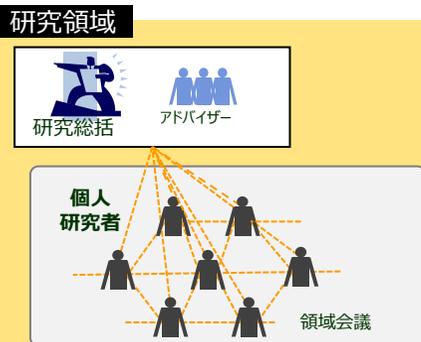
トップ研究者による**チーム型研究**



研究期間：5年半
研究費：1チームあたり
年5000万円程度

さきがけ
PRESTO

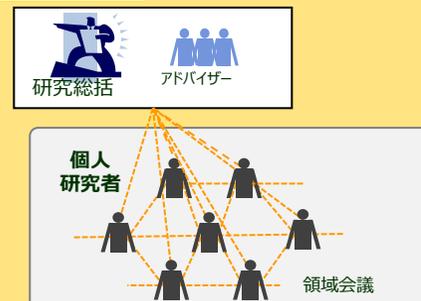
若手研究者の登竜門（個人型）博士取得後8年未満（個人型）



研究期間：3年半
研究費：1人あたり
年1000万円程度

ACT-X

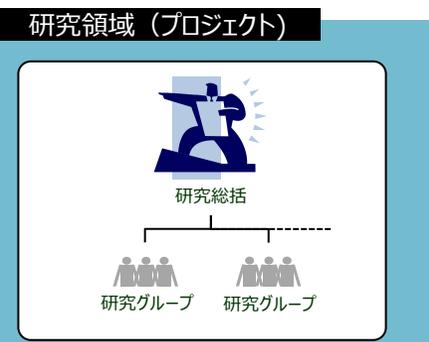
研究領域 ※令和元年度発足



研究期間：2年半
研究費：1人あたり
年数百万円程度

ERATO 等

卓越したリーダーによる研究



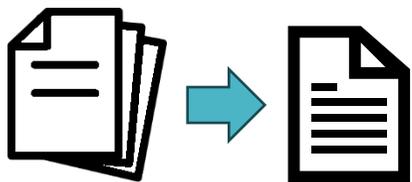
研究期間：5年程度
研究費：1プロジェクトあたり
年2億円程度

※「さきがけ融合研究加速支援」は、さきがけ研究で得られた成果に基づき、異分野の研究者とチームを形成し、発展的な融合研究を行う研究課題に対して、さきがけ研究終了後から最大2年間の追加支援を行う制度。追加支援を受ける研究課題は、それまでのさきがけ領域ではなく、CREST領域の研究総括によるマネジメントのもとで研究を実施。

研究者に寄り添った機動的な事業運営でトップ研究者の研究の深化を支え、若手研究者の育成を通じて次世代の人材基盤づくりに貢献

研究者の負担軽減

事業間での差異や不統一により生じていた提案者・採択者・評価者の作業負担や不便を解消すべく、各研究開発事業において、**事業横断的に「評価項目」を統一化**。統一された評価項目に沿って、**提案書・報告書様式の項目・構成を共通化・簡素化**。（令和7年度～）



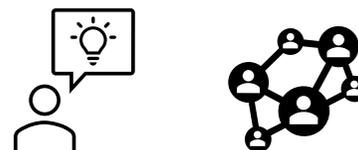
研究課題の進捗に応じたきめ細かな支援

- ・**研究計画の柔軟な見直し**（研究総括の判断に基づく研究費の増額・繰越）
- ・**研究室立ち上げを支援する**さきがけスタートアップ支援制度
- ・**ライフイベントと研究の両立支援**
- ・PIのみならず**研究分担者（Co-PI）にも直接経費から人件費の支出を可能にする**（令和8年度～）等



若手研究者による挑戦的な研究の促進

- ・さきがけにおける**柔軟な採択制度**（海外研究者の採択及びさきがけ専任研究者制度）
- ・**国内外で開かれる領域会議**により若手研究者間連携を促進、国際研究への挑戦をサポート
- ・**若手研究者のチーム型研究支援制度を導入（さきがけ融合研究加速支援）**（令和8年度～）



海外FAとの連携公募 国際展開の促進

- ・海外FAとの**連携公募を開始**
 - * 仏ANR（平成30年度～）
 - * 米NSF（令和7年度～）
- ・米国ローレンス・リバモア国立研究所主催の**インターンシップやEMBOフェロウシッププログラム等への若手研究者の参加支援**。
- ・欧州情報処理数学研究コンソーシアム（ERCIM）等、**海外研究機関と研究領域との連携**。



研究に集中できる環境整備
→研究時間や必要な資金の確保

挑戦の促進のための環境整備
→研究内容の加速

具体的な取組事例（国際展開）

■『ゲノム合成』日英国際会議



- CREST「ゲノム合成」研究領域（塩見春彦PO）が開催。日・英・カナダの最前線の研究成果を発信。
- 本会議を契機に国際共同研究が2件立ち上がり、そのうち1件がASPIREに採択。



■フランスの研究機関との共同ワークショップ



- さきがけ「情報担体」研究領域（若林整PO）がフランスのCEA-Leti（フランス原子力・代替エネルギー庁附属 電子情報技術研究所）と共同ワークショップを開催。
- さきがけ、Letiの研究者が発表・討議し、2件の国際共同研究が始まった。



■欧州情報処理数学研究コンソーシアム（ERCIM）との連携



- AIPネットワークラボ（江村克己ラボ長）の取組として令和3年度より毎年度連携ワークショップを開催。
- 令和6年度に共催した第5回国際シンポジウムでは、10カ国の研究者が集い、連携研究課題とその推進施策等を模索した。



科研費および戦略事業による効果的な支援例

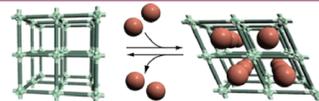
北川進（京都大学・特別教授） 多孔性金属錯体（MOF）の開発



<https://kuias.kyoto-u.ac.jp/j/profile/kitagawa/>

科研費等の研究成果として「**多孔性金属錯体（MOF）**」を発表。その後、特にERATOにおいて、**CO₂を高効率に分離・回収するMOFを設計し、実用化に向けた基盤的な技術を確立。多様な用途展開の道を開拓。**

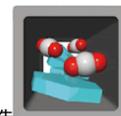
ERATO成果



ガス分子の物理的な性質のわずかな違いを見極め、細孔のサイズや形状の変化を伴いながら、ガス分子を吸着



CO₂吸着による構造変化と蛍光変化



戦略的創造研究推進事業

ACCEL
PCPナノ空間による分子制御
科学と応用展開
(2013～2017年度)

ACT-C
多孔性配位高分子を反応場
に用いたメタノール合成の開発
(2012～2017年度)

ERATO
「北川統合細孔プロジェクト」
(2007～2013年度)

⇒ERATOの研究において「**高いCO₂分離能**」と「**吸着後のCO₂の低エネルギー回収能力**」の両方を有するMOFを設計!!
実用化に向けた基盤的な技術を開発。

ERATO後は、MOFの**実用化**を見据え、**効率的製造方法の開発（安価化）**に取り組んだ。

近年は、さきがけの研究総括として**若手研究者の育成**にも精力的に取り組まれている。

戦略的創造研究推進事業
(さきがけ) 研究総括
材料の創製・循環
(2024～2030年度)

ノーベル賞研究

気体分子を大量に吸蔵できる、**多孔性金属錯体**を発表（1997）

Mission-oriented Research

2025年
ノーベル化学賞
受賞※

※ERATOの「北川統合細孔プロジェクト」の共同研究総括であるOmar M. Yaghiも受賞

1997年度

2008年度

2010年度

2012年度

2014年度

2016年度

2018年度

2020年度

2022年度

2024年度

2025年度

科研費 1980年度以降、継続的に支援。以下は採択課題の例。

1980年度	奨励研究 (A)	新しい銅(I)錯体の合成ならびにその酸化還元反応機構に関する研究
1990年度	一般研究 (C)	3次元ネットワーク構造を持つヘテロ縮合環配位子架橋銅錯体の合成と物性
1993～1994年度	試験研究 (B)	超高感度固体高分解能遷移金属核NMR検出器の開発

2001～2002年度 基盤研究 (B) 錯体を用いる分子ストレスナノ空間の機能化学

2013～2017年度 特別推進研究 階層的配位空間の化学

2022～2026年度 基盤研究 (S) 有害・危険性物質の微量検出・分離・変換の多孔性配位高分子ハイブリッド科学の開拓

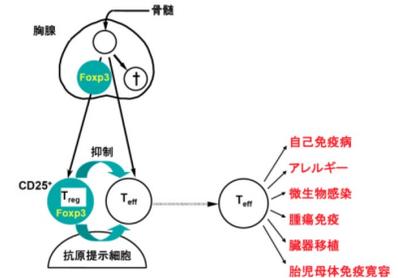
Curiosity-driven Research

坂口志文 (大阪大学・特任教授) 制御性T細胞(Treg細胞)発見



<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2025/10/06001-2>

さきがけ・科研費等において、**Treg細胞発見の根拠となる論文成果(1995年)を創出**
「さきがけ」後は制御性T細胞の機能を詳しく検証し、免疫系疾患の治療に繋げるべく、両事業を行き来しながら研究開発を進展。



制御性T細胞による免疫制御

(大阪大学作成資料より <https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2025/10/06001-2>)

ノーベル賞研究

戦略的創造研究推進事業

アメリカでの8年間の奨学金が切れる前に日本に帰る先を探していたところ、「さきがけ専任」に採択！
さきがけ1期生として、坂口博士の才能を研究総括が見極め、採択。

さきがけ研究
21
細胞と情報
(1991~
1994年度)

CREST
免疫難病・感染症等の
先進医療技術
(2003~2008年度)

CREST
炎症の慢性化
機構の解明と
制御に向けた
基盤技術の創出
(2012~2014年度)

AMED-CREST
LEAP
★ AMED-CREST
炎症の慢性化機構の解明と制
御に向けた基盤技術の創出
(2015~2017年度)
★ LEAP
(2018-2022年度)

制御性T細胞
の発見を発表
(1995)

Mission-oriented Research

※SUCCESS
(出資型新事業創出支援プログラム)
大学発ベンチャーのレグセル株式会社への
出資 (2017年度~)

2025年
ノーベル生理学・
医学賞受賞

アメリカ
スクリプス研究所で
研究

1991年度 1994年度 1997年度 2000年度 2003年度 2006年度 2009年度 2012年度 2015年度 2018年度 2021年度 2024年度 2025年度

科研費 1996年度以降、継続的に支援。以下は採択課題の例。

1996年度	重点領域研究	自己免疫病発症の分子機構:自己反応性T細胞の制御機構について
2001~2006年度	特定領域研究	制御性T細胞による免疫自己寛容維持機構の解析とその機能操作による自己免疫の修復
2014~2016年度	基盤研究 (A)	関節リウマチを中心とした自己免疫病の免疫学的基盤の解明と新規治療法・予防法の確立
2016~2020年度	特別推進研究	制御性T細胞による免疫応答制御の包括的研究
2024~2026年度	基盤研究 (A)	制御性T細胞の発生・分化機構の解明と免疫疾患治療への応用

Curiosity-driven Research